

卒業・修了 にあたって

学部 ——— 卒業

総合科学部と私

総合科学部 大村 尚

高校一年の頃、自分の進路に迷っていた私は大学調査なる課外授業でたま総合科学部の存在を知ることになる。思えば我が学部とはその時からの付き合いになる。栃木から遙々広島に

やって来て早四年、変貌する世界情勢さながら自分自身も成長し、学部ひいては大学の実像が徐々に見えつつあるように思う。

入学当初夢見ていた文理一体の総合科学などここには存在せず、自分の思い描いていた総合科学を実践できなかった事に唯一悔いが残る。諸科学の融合という崇高な理念には遠く及ばぬ、既存の学部と何ら変わらぬ学問の中に埋没していた年月だったように思う。しかし、様々な分野の人間そして学問との出会いに恵まれた事は、私にとって最高の幸せであった。多くの人々から様々な人生観を、諸学問からは物事の多面性を学べた四年間は掛け替えのない有意義な時間であったと思う。最後に、私を育ててくれた多くの人々に対し心から感謝したい。



卒論発表会の打ち上げにて (右手前)

広大の春夏秋冬

文学部 村尾 章子

春宵の公園。新しい環境と人間関係に神経性胃炎になりながらオリキャンの準備をしていたフレッシユマン。真夏の総科の授業。風の止まった鮪詰め風の教室で、前の人の首筋を伝う汗を眺めながら南極へ行きたいと念じた。

秋、メタセコイアの

葉が降り頻る森戸道路を感動しながら歩いた。錦の絨毯は踏む度に乾いた音をたてた。

北風の吹く冬の日。温かい肉マンとコーヒーが遅くまで研究室に残ったときの味方だった。



福山での過酷な教育実習終了を祝う気のいい仲間達 (中央前)

思い出を彩る

教育学部 繁 永明 江

蓮華色の通学路、青い中庭の芝生、煉瓦色の並木、霜の降りたフロントガラス、私の大学生活の思い出は様々な色の移ろいと共によみがえる。

卒業を迎えるこの時期、一つの思い出は先輩の送別会の席を彩った花の色に遡る。その薄桃色をしたスイートピーの花弁の愛らしさは優しかった先輩方

広大で四回ずつ繰り返した春夏秋冬。いろんな毎日があった。四季は人の思惑などお構いなく巡るけれども、この四年間幸せだった。多分、今夜隕石が落ちてきて死んでも後悔しないくらい。幸せな学生生活だったのである。



'92年度卒業ゼミ生送別会にて

大学生生活、はや四年

学校教育学部 中村 光 則

この広島大学に入学して、早いものでもう四年が過ぎようとしている。思えば広大入学もずいぶん昔のことのように、それだけに大学四年間というのが、中身の濃い、充実したものであったのだからと言いたいところであるが、実際のところ、その日暮らしの無計画な生活をしていたように思う。

入学してまず最初の行事と言えば、オリキャンである。このキャンは、大学生活を共に過ごす友を得る最初の行事である。そして、研究室ごとの合



教育実習後のピアガーデンでの打ち上げ

の印象と今だに良く調和している。そして春という喜びの多い季節を象徴する花の色でもあった。

食卓や研究室に花を飾る楽しみも、人に花を贈り、また贈られる喜びも学部時代に教官や周囲の人々から教わったものである。そして今、私の研究室では友人が生けてくれた猫柳が早くも春を知らせてくれている。

潤いのある生活空間の演出に自然の色を大切にし、巧みにそれを用いることの出来るすばらしい感性を持った友人達と、これから来る私達の卒業の季節を共に彩ることの出来ることを、私はとても嬉しく思う昨今である。

卒業を迎えて

宿、研究室対抗スポーツ大会、大学祭、東雲祭と、次から次にいろいろな行事がやってくる。それらの行事が終われば、なくてはならないのが打ち上げコンパである。このコンパで飲んでる時こそ自分は大学生してるなあと感じる

法学部 多田 和 恵

「和恵ちゃんも卒業ね。これからはっきり頑張って親孝行しなくちゃね。」

お正月にこんな言葉を聞き、いよいよ卒業なんだなと実感するこの頃。不安と希望を抱いて法学部へ入り、

めまぐるしかった一年を終えて、いろいろなことを思い悩んだ二日目。そして楽しい思い出をたくさん作ることができたのが、三年から始まるゼミ活動であった。ソフトボール好きで、とても優しいM先生。個性豊かな仲間と、共に学んだり、語り合ったりしたこと。リフト乗りに悪戦苦闘したスキー合宿。そして精一杯プレーした法学部ゼミ対抗ソフトボール大会。

苦しかったことも、ここには書きつくせないほどある。しかしこの四年間は、わたしにとっていい勉強になったであらうし、その成



ゼミ対抗ソフトボール大会で優勝した時の喜びの1コマ

果を見るためにも、少しでも社会に貢献できる人間になりたいと思う。

最後に、今までお世話になった方々に感謝しつつ、学生としての自分に区切りをつけたい。

時であったように思う。

もちろん大学生は勉強が本分。そのつけはしっかり四年生になってまわってきたようで、最後の一年間はアツという間であったが、遊びに勉強に全力投球の四年間であったような気がする。

私の四年間

経済学部 湯 浅 英 夫

私の大学生活は、入学式用のスーツを作ることから始まった。ぎこちなく着ていたあの頃からもう四年。早いものである。その入学式の時、私は一つ



瀬戸大橋にて

の目標をたてた。「四年間で日本各地に友達を作ろう」幼い頃から友人達と時を過ごすのが大好きだった私にとって、全国各地から人間が集まってくると思っていた大学は、願ってもない場所だと思っただけである。その通り、大学では様々な方言が飛びかい、新鮮さを感じたものである。アルバイトの関係で、他学部の学生とも知り合う機会があり、友人は徐々に数を増していった。そうした人と人とのつながりの中で、私自身本当に一周りも二周りも人間的に大きく成長できたと感じるものができる今、この四年間悔いるものは何一つないといった心境である。そして、入学式の際のあの目標のおかげで、日本全国をまたに掛けて旅行することができたのだから、なおさらのことである。

ありがとう 皆様

経済学部 留学生 クー・ペク・スアン

四年前、広島大学に受かった頃のこととは、まるで昨日のことのようである。ほっとしたのと頑張ろうという気持ち

は、今でもはつきり覚えている。あれから、あつという間に四年間が去ろうとしている。

大学生活が終わると共に、この四年間のことも少しずつ思い出されるようになった。つらかったことと困ったことが、一杯あったが、一人の力でこの留学生生活を歩んできた私に「おつかれさま」と言いたい。しかし、その前に、世話してくださった多くの方々にお礼を心から申し上げたいのである。先生の方々ははじめ、日本のお父さんお母さん、事務や学校の皆様、そして、国際交流の場でやさしくしてくださいました皆様、ありがとうございます。皆様、本当にありがとうございました。

大学生生活の実態

四年前、遂に私も大学生になった。「女子大生」という言葉は世間では少し淫靡に響いた時代だったが、恵まれた環境の中、殊に、西条での生活は健全なものであった。とはいえ、自分の城を持つと、次第

に遠のく親からの電話に寂しさを覚えながらも、解放感を満喫するものである。まず、時間の感覚がなくなる。車などを入手した場合には、距離感さえもなくなる。かくして草木も眠る丑三つ時に暴走する車が発生するのである。

理学部 小 出 千 絵



1991年江田島でのゼミ旅行



理学部移転前に東千田キャンパスで友人と

もはや大学生にモラルなどない。地元の方には本当に申し訳なく思う。こうして気の合った仲間が集まって、人生論を交わした。一昔前までの大学生ならばもっと知的な討論もしていたのだろうが、私にとってこれが精一杯の哲学であったと思われる。そして夜を徹する。
その結果翌朝のゴミ収集を寝過ごすことになっても、こうやって得た友人は、きっと将来も心の支えとなってくれると信じている。

薬学と私

医学部 久保理恵

受験戦争脱出直後の私は、「薬」を効くか効かぬかの面で見ず「薬学」を国家試験対策の暗記物と軽視していたように思う。が、やがてその愚考を身をもって実感した。

生薬から人工物質まで広範囲に及ぶ「薬」は作用点・作用様式により様々な顔を示す。故に「薬学」には責任感と的確性が要求されるが、当然のことながらそれは実学である。「正答」を示す教科書など無く、自ら実験することによりそれを導き出さねばならない。期待に満ちた結果として大きな失望があてがわれたこともある。その度に原

研究にも息抜きは大切？
薬学科内ソフトボール大会で優勝



六年間を振り返って

因究明及び新方法提起に苦悩し、投げ出したい衝動に駆られる。が、試行錯誤の末の成果はその分大きく、それまでの労因を隠滅し、新たな意欲を沸き立たせる。大学生活はその繰り返しだ

つた。
この四年間「薬学」は私に様々な経験を与え、私はその度に「薬」への関心がいつそう深まるのを感じた。卒業後も私は、「薬」と携わっていく。

歯学部 田口克弥

広島大学に入学した当時は長いと思った六年間も、こうして卒業を目前にすると、あつという間だった気がする。私の大学生活を振り返ってみると、自分なりに充実した六年間だったと思う。

うと思う。
最後に、六年間御世話になった先生方、クラブの部員の皆さん、そして共に学び共に遊んできた仲間達に、感謝したいと思う。

一、二年次においては、クラブ中心に生活が回っていたという感じで、自由というのを満喫した。霞キャンパスでの専門課程は、打って変わって朝から夕方まで講義と実習の毎日で忙しかったが、その息抜きにクラブがあり、友がいた。そして六年次の臨床実習では、時間に追いつてられ、不勉強を痛感し、あわただしく一年が過ぎていった。このような六年間に経験したこと、学んだことを十分に生かし、広島大学の名に恥じない歯科医になるよう、頑張っていこ



クラブの部員と東京にて

サークル活動を振り返って

工学部 板垣 吉晃

入学する前から大学のサークル活動の雰囲気は憧れていた私は入学すると同時に、まずどのサークルに入るのか

考えた。サークル活動を強く望んだのは、勉強以外に何か打ち込むものが欲しかったこと、また同じ事に興味をもつたくさんの人と出会いたかったからであった。

考えた末、以前から興味があったゴルフ愛好会（現在ゴルフ部）を選んだ。入部してからは、以外に早くうちとけることができ、多くの先輩そして友人に出会うことができた。また、自分としては、活動にしっかりと打ち込むことができたと思う。

今、大学生活を振り返ってみると、やり残したと思えることは数多くある。しかし、サークル活動を通じて一つの充実感が得られたこと、特に、精神面でかなり成長することができたことに對して、多くの先輩、友人に感謝している。



合宿の打ち上げにて

留学して良かった

工学部 留学生 ヨー・グアン・ケット

本国にいるときに比べると、日本に来て、より多くの情報が入るようになり、自分がこれから社会で生活してい

くの大きい役立っだろう。これよりも私は日本に来たことよって、自分の国をもっと理解できたことに気づい



友人と一緒に日本海までドライブに行ったとき

た。

来日して、二年後大学生になり、自立のチャンスに巡り合った。学部三年

北海道農業体験記

生物生産学部 大槻 祐吾

私は、自分自身の大学生生活を、勉強に遊びに恋(?)に燃えたと思っている。麻雀、競馬に狂った一年目、読書にふけった二年目、フルマラソンを三回走った三年目、教育実習、卒論と勉学に励んだ四年目と、大学生活を振り返れば、様々な思い出が浮かんでくる。その中でも、夏休みに五週間北海道で働いた農場実習は、つらく楽しい思い出として、心に残っている。

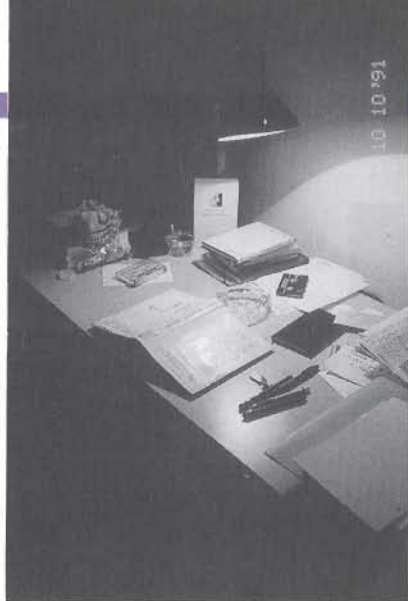
農場実習では、酪農家と肉用牛農家にお世話になった。まず、北海道農業

生までは自分で生活費などをかせぎ自給自足していた。つらいことも多かったが、とても充実していた。アルバイトを通じて多くの人と出会って、独り暮らしのために生じた心の隙間も埋めることができた。そして、大学で学ぶことのできない知識や日本の事情もたくさん学んだ。

研究室に配属された後も、自分はアルコールに弱いので、飲み会があるときにちょっと悩むけれど、楽しかった。最後に、長い間、いろいろとご迷惑を掛け、ご指導をしてくださった諸先生方本当にこのころから御礼を申し上げます。



フェニックス駅伝を走り終えて



目を閉じると、二つの網膜が一枚の闇を作った。一本のサスペンションライトが降り、その中に僕は自身を置いた。逆方向のベクトルになって、僕は回想の中を走った。何処に向かうのか

空想「文学」工房

文学研究科博士課程前期 高木敬二

大学院
専攻科

修了

の規模の広さに圧倒された。また、思っていたよりも体力消耗が激しく、早朝からの仕事でもあり、体力に自信のある私でも、さすがにきつかった。特に、早いときには午前三時から行った大根抜き、肉牛の去勢やホルモン注射など

は、炎天下の汗だくの仕事であり、思っただけの汗で済まなかった。早朝の仕事を共にして汗を流し、大変有意義な日々を送ったと思っている。最後に、私の大学生活を楽しくしてくれた良き友に感謝の意を表したい。

パリ第四大学留学中の下宿先にて

も知らずに走り続けた。虚無の風景や焦燥の言葉を過ぎると、青く淡い水銀燈の光が見えた。マツチを一本擦った。電燈のないクランプボックスの中で、ポツという炎の音とともに謄写版が見えた。が、それは見る間にもとの闇の中に消えていった。Kと僕は手探りでローラーを動かした。インクのムラがない様に注意しながら、寒さにかじかむ手を休めなかった。一頁分刷り上げるとボックスの外に出て、丁度十四号館を出た所の水銀燈の下で印刷の出来を確認した。朔風の中で震えながら、それでも何度も何度も

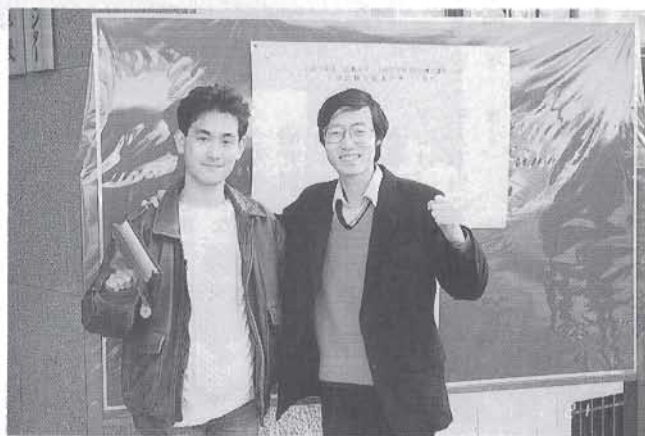
見直した。「ぼいえしす」という表題が少しにじんんでいるような気がした。刷り上げた何十枚かのザラ紙の上に、まずぼつとした。なんと日本でも漢字が使われているではないか、そこで私は中国と日本には文化的な共通性があることに気付いたのである。そして、東洋史研究室に入ってから、来日以前にもっていた不安は全く無くなった。なぜなら、まず研究室の教官・学生には、中国語に堪能な方が多く、筆談を使えば全ての人とコミュニケーションをとることができたからである。しかも、研究室の皆さんは、中国に関する造詣が深く、お互いの理解の障害となるものがほとんどなかったのである。そして、皆さん私にたいへん良くしてくださり、研

留学雑感

文学研究科博士課程前期 留学生 蔡 徳 栄

留学が決定した三年前、私は国外に出たこともなく、また日本語も知らなかったことでもあり、非常に不安であった。しかし来日直後、神戸港で見た看板に漢字が使っているのを見て、まずぼつとした。なんと

究・生活両面で私はこの三年間留学生活を平穩に過ごすことができたのである。今後も、私は日中の相互理解のために尽力したいと考えている。



大学院合格発表の記念写真
(左は同級生の清水靖義氏)

インド調査に参加して

文学研究科博士課程後期 荒木 一 視

博士課程後期三年のうち、後半の二年は毎年インド通いだっただ。広島大学の地理学のスタッフを中心に組織され



インド、ウエストベンガル州の農村での調査風景

ているインド調査隊の一員としてのインド行である。調査自体は毎年二ヶ月程度であるが、出発前の準備作業、帰国後のデータ整理、報告書のまとめ、これが時間のかかるたいへんな作業である。現地でも暑さに耐え、渴きに耐え、湿度に耐え、なかなかたいへんな調査である。観光地に行くのではない、観光客など生まれてこのかた見たことのないというインド人の暮らしているインド人の村へ入っていくのである。きれいな水、電気、秒刻みの時間が支配する世界、我々の暮らしはそこにはない。しかし、我々の暮らしがいつか捨ててしまったものがそこにはある。それは、親切、近所付き合い、ゆつくりと流れる時間……インドはいい国である。四月からは一応私も大学教官、さあインドと今後どう付き合い合っていく？これからの腕の見せどころである。

大学生生活の思い出

広大で過ごした六年間はいろいろな

ことがあった。東千田キャンパスで、

教育学研究科博士課程前期

磯村 桑本 大下 弘子
聡秀 美子

国憲に苦しめられたこと、二年から福山でオーケストラに入り、「第九」を演奏したこと、西条

で大雪が降り、バスをじっと待ったこと、大学院で研究を続けた(?)こと、すべてがとても貴重な思い出となった。(桑本)

学部生時代は生涯の友人との出会いやオーケストラ活動等、まさに青春の日々であった。そして院生として過ごした二年間は良き仲間を支えられつつも研究の難しさを痛感し学部生の時とはまた違った意味で心に強く残った。この広大での様々な思い出をこれから折に触れ思い起こすであろう。

(磯村)

東千田・福山・西条と、三つのキャンパスで過ごした大学生活だったが、福山での一年半は非常に思い出深い。今はなき音楽棟でアットホームな雰囲気

大学生生活を振り返って

教育学研究科博士課程後期 廣瀬 等

教育学部の八階の窓から見える、自然がいつぱいの風景は、いつも心をなごませてくれた。同時に、理学部、総合科学部と新しい校舎の建設が続き、日々完成へと向かって動いている姿に未来への力強い希望のようなものを感じ

じ、勇気づけられることが多かった。大学院での生活も五年が経過したわけであるが、心理学教室の「伝統」という確かさと、「改革」という新鮮さの中で研究をすることができたのは、本当に幸せなことであったと思う。カ



昨年11月、学会の帰りに鳥取県白兎海岸にて左から桑本、一人おいて大下、磯村



初めての学会発表[於：筑波大学]の後で（左端）

今考えてみるとよかった

教育学研究科博士課程後期 留学生 玄 正 煥

私が所属している幼児学は、学生の人数の割に居場所が少なく、静かに勉強できる環境とはかなり程遠かった。しかし、そんな環境だからこそ同じ研究室の人達と研究や大学生活に関する情報を交換することができてよかったと思う。今まで、私は、子どもは何歳になれば自分の能力を正しく評価することができるとか、そしてその発達に影響を与える要因は何かという問題に関心を持ち、様々な研究をしてきた。私にとって、それらの研究を一つの論文にまとめ上げるのは大変な作業だったが、そのおかげで学問の入り口がやっと思えるようになったような気がして



1989年9月附属幼稚園のお泊り保育にて(中央)

リキウムが変わり整えられた環境で、羽生義正先生、森 敏昭先生をはじめ諸先生方にご指導いただき、充実した日々を過ごすことができた。
毎日の生活では、学会での発表、修士論文、紀要や学会誌への執筆、博士論文と、次々に「新しい難題」が現れて苦労したのも確かだが、それは、今から考えると一つ一つが大切な経験であった。これからも、この博士課程で学んだ事を基礎にして、自分の研究をより発展させていきたいと思う。

さあ、頑張ろう

うれしい。将来、私の論文が、うだれでも自分自身に対する自信と張合いに富み、何事にも意欲的に臨む子どもを育てることの参考となれば何よりも

教育学専攻科 柘 植 正 人

う。

教育学部での四年間は、はつきりいつて体育会サッカー部中心の毎日であった。部活を通じて、数多くの素晴らしい先生、先輩、後輩、友人と出会い、また、全国大会出場、中国遠征、韓国遠征など、何事にも変え難い貴重な体験をした。これらのことが、私をひとまわり大きな人間にしてくれたことは言うまでもないことである。
それから私は教育学部を卒業した後、さらに人間を磨こうと、教育専攻科に入学したわけだが、やりたいと思っていた事の半分も実行できなかったと思う。唯一悔やまれる点である。しかしながら、専攻科での、学部のひとつ上をいく討論形式の講義は、私にとってたいへん意義のあるものであり、たいへん勉強にもなったものである。
これからは、大学生活で経験した様々なことを生かし、教師としてがんばっていききたい。立派な教師になることで、お世話になった方々に、恩を返すことができるのだと思う。さあ、がんばろ



私の大学院生活

学校教育研究科修士課程 藤井典之

二年前に理学部化学科を卒業し、化学教師になる志を胸に秘め、学校教育研究科に入学したのも束の間、もう修



了か嬉しくもあり悲しくもありといった思いである。振り返れば私の大学院での生活は、学部で四年間学んだことはまた少し違う分野で、自分は今うまくやって行けるだろうかなどと、まるで転校生になったような不安と希望から出発したように記憶している。

修士の二年間は学校教育における理科の担う役割、あるいは実験・観察を通じた科学的思考力の育成の重要性を学び、時には厳しく、時には優しく、二才の私を指導して下さいました先生方に感謝の気持ちでいっぱいである。

もちろん、先生の目を盗んでは研究室の同僚とテニスやスキーそしてパソコン、酒、カラオケと別の意味で学生時代を謳歌したこともいい思い出になっている。

写真は、私（左側）が実験に励むかたわら（？）、いつも激励してくれた先輩と写ったものである。

ギャップは変な具合に埋まった!

特殊教育特別専攻科 清水一郎

「広大有数の異年齢集団」が、このクラスだ。大学を出たばかりのフレック

シユマンと国内留学の現職教員の混成であり、さらには一緒に授業を受けることの多い研究生らが微妙にあやなす複雑怪奇な人間模様。世代間ギャップは大きく、その差はとて埋まらないだろう……と、当初は思われた。しかし、さにあらず。三者年齢を感じさせぬ「勉学への意欲」「遊びへの渴望」「サボリへの誘惑」などの一致で、変な具合に打ち解けてしまった。

さて、一年間で最も思い出深いことといったら、何といっても教育実習だろう。附属の養護学級、県内の養護学校と収穫の多い数週間であり、現場の大変さと面白さが身にしみて分かった。いよいよあとわずかで修了だ。出来れば何年でも学生をやっていたいが、そうもいくまい。いま、ただひとつの気がかりは、クラスメートの進路だ。

大学・大学院生活を振り返って

社会科学部研究科博士課程前期 平岡敬子

三年前まで看護婦だった私が大学院を修了するなど、かつての人生計画にはなかったことである。きつかけは

ちよつとした好奇心から法学部二部に進学したことだった。ところが、ここで生まれて初めて自ら学ぶ楽しさを知り、次第に「看護」の置かれている位置付けに疑問を抱き始めた。大学院に



談笑風景。話の「サカナ」になるのは、いつも決まって若いM君

皆希望どおりに、笑顔で人生の再スタートをきって欲しいと願わずにはいられない。

進んだのは、この疑問に答えるためであった。

大学院で得たものは、一つは文献収集と分析・官僚へのインタビュー・論文作成等を通して研究の方法論を学んだことである。そしてもう一つは心から尊敬できる師、同じ志をもつ若い研究者たちに巡り合えたことである。私



7年も日本にいた私の着物姿は、
こうである。いかがであろうか。

海外で見た日本人は、皆礼儀正しく感じのよい人ばかりであった。それは日本で行った教育の成果に違いないと思っただけで、日本に来て見たら、思ったほどではないことがよく目に付いた。例えば、最初学部生と一緒に受けた講義が終わった時、一生懸命に講義して下さった先生は、一人で寂しそうに黒板に書いてある字を拭いていた。こういった光景を見た私は、驚いて悲しくなった。と同時に何故、学生たちが先

私の見た広大生

社会科学部研究科博士課程後期 留学生 曾 秋 桂



恒例となった林ゼミ宮島キャンプにて(前例中央)

は彼らとの係わりの中で、知識を得るだけでなく、組織の一歯車ではない自分を再発見できた。

私の学部・院生時代は、そのまま子供たちの成長の軌跡でもある。一年目の九月、試験期間中に生まれた息子は六歳に、政治学の外書講読中に陣痛が始まった娘は四歳になった。慌ただしい毎日の連続、夫や夫の両親はよく協力をしてくれた。子供たちも病気やけがをしないことで協力してくれた。私が修士号を取得できたのは、多くの人々の支えがあったからである。心から感謝すると共に、これからも前述の疑問に答えるために研究を続けていきたいと思う。

大学院生の研究

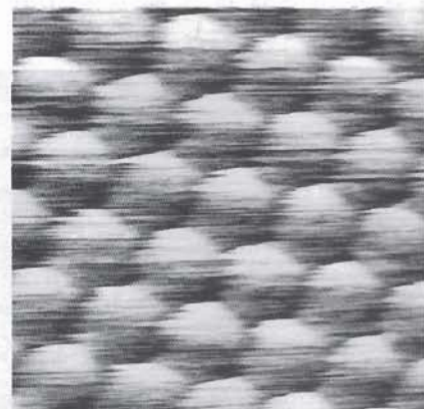
理学研究科博士課程前期 藤 沢 悟

生にそこまでのことをさせることが出来るのであろうかと、疑問に感じて不思議でたまらなかつた。後、ある学生にそのわけを聞いてみたが、僕らは授業料を払い、先生は給料をもらうので、黒板を拭くぐらいのことなら、当たり前前のことに決まっています、その学生

が答えてくれた。その答えを聞いた私は、ますます愕然とするばかりであつた。その後、体験したことから見ても、残念ながら、広大生に対するイメージは、さほど変わらなかつた。幸に最近、正直で思い遣りのある広大生たちと知り合いになつていく。

私の在籍している研究室は一般に言う実験系の研究室であり、新しい顕微鏡の開発とともにそれを用いて新しい現象の観測を行っている。研究生生活を振り返ってみると、自分のやっている研究は自分でなくてもできるものであり自分の存在価値は特に無いのではないかと思ってしまうことがあつたことを覚えていく。便利なものが多い現在では大学の研究と言えども、装置を購入してただそれを動かすだけでも言える状況が発生している。さてこの場合、我々大学院生の存在価値は一体何であろうか。測定結果を生み出す装置の運転者であろうか。それとも教官に言われたことをひたすらこなす便利屋さんであろうか。その側面も持つ

ていることを否定はできない。しかし、学問を志している以上プロの研究者であり、研究の結果には責任がある。大学院生として大切なのは、その心構えであり、そのために努力することであると一言えないうか。

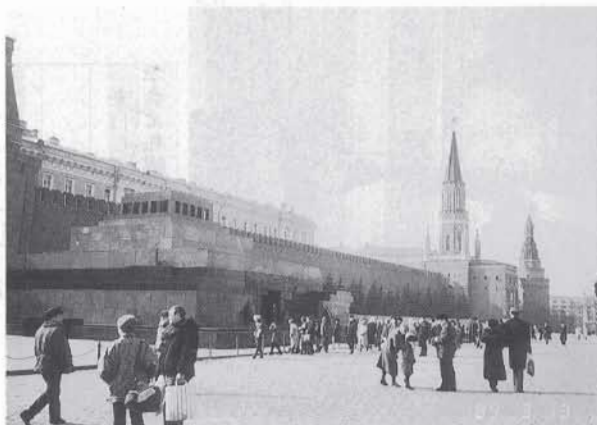


原子間力顕微鏡による
グラファイト表面の炭素原子像

大学時代に得たもの

医学系研究科博士課程前期 大塚 由美子

「考え、計画し、行動すること」
常にこの言葉を心に大学生生活を送って来た。今、この六年間を振り返って



私が訪れた時の「赤の広場」今はどうなっているのだろうか。

みるとこの心がけは私に貴重なものを与えてくれた様に感じる。幅広い知識や磨かれた感性を得ようとする他の講義に出たり、様々なジャンルの本を読むことに努めた。美術や映画鑑賞も私にとっては大切な勉強であった。そこから生まれた見知らぬ土地への憧憬は私を旅へとかりたて、貴重な経験を得ることが出来た。旧ソビエトへの単独旅行では、社会主義国の理想と現実を見せつけられ、文化や言葉の異なる民族を抱える大国の難しさを考えさせられた。スペインでの日々は私にラテン民族の底抜けの明るさや地中海の海の美しさや太陽の明るさに包まれた生活を堪能させてくれた。

こうして考えてみると、これらの事は全て冒頭の言葉を常に心掛けて来た賜物であろう。しかし、やはり私を支えてくれた家族や友人達のおかげであり、卒業を前に改めて感謝したい。

教室を中心に

医学系研究科博士課程前期 留学生 薛 弼

母国で主に臨床医療に従事した私は
いつか医学研究もする事がずっと夢で

あった。三年前広大名誉教授瀬川富郎氏の御招請を頂き本当に嬉しかった。初めてのたつた一人で外国の留学生活は勿論大変であったけど瀬川先生をはじめ教室員の皆様が友好な手を出して非常に親切にして下さった。やっと修了に臨み、感謝の気持ちで一杯である。

国の違いで考え方の違いは沢山ある。一つ習うべき事は「教室中心」の観念である。日本の方は教室を自分の家或いはこれ以上に認めようである。誰で

大学院生活をふり返って

医学系研究科博士課程 谷本 博利

医学系臨床科の大学院入学資格には医師免許を有することが含まれていたため、平成元年五月、医師国家試験の合格発表から大学院生活は始まった。昼夜を問わない出産、手術等、連日の過酷な臨床トレーニングで毎日が過ぎて行っていた。当直室で朝焼けの黄金山を眺めながら、学問（医学）とその実践（医療）の複雑な関係についての自答の間に一年間が過ぎた。臨床を離れ、癌細胞の遺伝子の変化を実験の中でみつめながら、生命の営みは何と不思議なものだろうかと驚いているうちにさらに二年

も朝早く学校にやってきて勉強と仕事だけでなく、食事、付き合い、テレビ、雑談、更にゲーム、休みでも教室を中心でやっている。毎年の旅行や試合やパーティなど勿論教室で出ている。その代わり、教室には各種道具が配置されている。パーティが出来るとキッチン設備、テレビ、スポーツ道具やら備わっている。このように、皆んなは仕事、勉強を中心、友達を中心にして学校を中心、国を中心でお互い助け合い、力は大きくなるであろう。



病棟で取り上げた新生児との記念写真



研究室にて

間が過ぎた。この一年、これまでに知り得たいくつかの事をまとめて行くうち、今の学問は先人たちの血の滲むような努力の積み重ねの上に成り立って

おり、自分の存在はいかに小さいかを実感している。現在、大学院修了にあたり、はじめて医師としての出発点にたどりつけた様な気がする。

イクラですか

医学系研究科博士課程 留学生 金 東 奎

来日してから約一年ほど経った頃、学会に札幌へ行った際、魚市場で起き

たエピソードがある。同行の先生が指をさしながら、イクラと言った。私は無返答の店の主人がおかしく思い、「これイクラですか」と聞いてしまった。先生はにっこりと笑っていた。当時、私はイクラと言えば、「幾ら」の意味しかないと思っていた。留学初期はこのような知識の不足とともに、ものの捉え方が偏っていた。生物統計学を専攻している私には、一元的な考え方は妨げであった。生物統計学においても他の学問と同じように、幅広い専門の知識と多面的な解釈が必要とされるからである。五年六カ月の留学生活の間に、自分の未熟な点が完全に埋められたとは思えないが、少なくともこれから一歩一歩研究して行く姿勢を身につけることができたと思う。このようになことが私の将来のステップアップにつながるのには間違いないだろう。研究者として目を覚ましてくれた教室の先生方々に心から感謝の気持ちを伝えたい。

大学院生活をふりかえって

歯学研究科博士課程 柴 秀 樹

私は四年間の大学院の研究生活を実に有意義に過ごせたと思っている。いままでも経験したことがない事をいろいろ体験し、自分が良い方向へ成長できたからだ。研究は試行錯誤の繰り返しの上で成功した。私の堅い頭も少し柔軟になったような気がする。忍耐力もつき、努力することの大切さを改めて感じた。自分一人では決して事は進まず、協調性をこんなに感じたことはなかった。

を支えてくれた人達、そして指導していただいた諸先生方に、心から厚くお礼を申し上げます。

最高の体験は、メキシコのアカブルコで開催された国際学会に参加したことである。まわりはすべて外国人。自分の力を知る最高の舞台である。視野を大きく、積極的に行動する必要性を痛感した。また、研究内容に対し質問があったのは嬉しかった。



国際歯科研究学会(アカブルコ)に参加会場前の広場にて

日本での私の学生生活

歯学研究科博士課程 留学生 セノ・ブラドボ

Selamat siang (こんにちは)。私はインドネシアの第二の都市スラバヤ

の出身である。幸運にも私は文部省の奨学金で広大へ留学する事になったが、



小児歯科国際学会にて（京都市、1991.10.）

わが青春

工学研究科博士課程前期 山根 誠

ドツカーン。昭和六十二年春、宮島の夜空に大輪の花が咲いた。その頃はまだまだ初々しい新入生。僕の体に新風を吹き込んだ。ここから僕の大学生活が始まった。授業が終わってから夜明けまでのミーティングも珍しくなかった。苦しいときもあったがそれ以上に得る

始めて広島へ来た時はとてもナーバスになっていた。まず広島市内に寮がない為、アパート探しが困難だった事や敷金などのシステムに戸惑った事などいろいろあったが、日本語を習い研究生を経て博士課程に入りもう五年半になろうとしている。ここでの大学生活は決して短いものとは言えずそしてまた母国と大きくかけ離れた、社会や文化・習慣・食べ物の違いなど実習や勉強の合間に多くの事が学べたことに感謝している。年に二回の学会への参加や広島インドネシア友好協会とインドネシア留学生協会との企画でインドネシアの文化などを広島の約四百人の方々へ紹介できたことなど良い思い出も多くある。卒業後も広大の先輩・後輩・同級生や広島で知り合った友達とより一層友好を深めたいと思っている。有り難う。また会う日まで

ものは大きかった。その時知り合った友人たちは広大十一学部におよび、これぞ総合大学といわんばかりのものだった。細かいことに気を配る奴、何も考えず行動に移す奴、またみんなをまとめていく奴などいろんな仲間がいた。そのため意見が衝突することもし

広島ファンです

工学研究科博士課程前期 留学生 張 建 鈞



第17回オリカン合宿にて

ばしばであったが自己主張しながらも助け合い、ひとつの目標に向かって突っ走っていたあの頃が懐かしい。いま振り返ると、苦しみが多いほど良い経験になるような気がする。広島大学よ、ありがとう。オリカン、オリカン。

広島と出会ったのはもう三年半も前のことだ。そのとき、広島については何も知らなかった。しかし、「第一印象で決めました」私はすぐに広島の大ファンとなった。広島カープ、宮島、お好み焼き、広島大学などに特別な感情を持つている。カープが優勝した時の喜び、宮島の敵島神社が台風の影響で倒れた時の悔しさを、地元の人に負けないほど強く感じた。なぜ広島がこんなに気に入ったか、自分でもうまく説明できない。ただ、今までめぐり会っ



研究室のゼミ旅行にて

た人はいいい人ばかりで、この人たちは広島出身ではなくても、広島で出会い、広島でお世話になった人々だ。この人たちに対する感謝の気持ちを日本語でうまく表現する事は難しい。その感情をあえていうならば、街そのものに恋をしたとでも言うべきか。国へ帰る日がだんだん近付いて来た。「第一印象で決めました」という広島を愛する気持ちをそのまま持って帰国するつもりだ。これからも広島ファンとして応援し続けたいと思う。

酒を片手に

工学研究科博士課程後期 中野 秀之

生来怠け者の私は、他人に宣言すること、自らにプレッシャーをかけ、なんとか修了の日を迎えようとしている。

最近、ある講演会の中で「百年、千年先に残る研究をしろ」と言う言葉が耳に残った。振り返ってみると、自分の興味ある研究は余興でしかないと言われ、紙切れの為の研究をしたこともあった。紙に残したことが私の励みになったのではなく、一喜一憂しながらの泥臭い失敗が私の軌跡である。既成の事実を疑い、自分流にやりたい事をやり、やはり先人は偉かったと感じる



注目を浴びた浜辺でのバーベキュー(小豆島)

東広島での私と家族

工学研究科博士課程後期 留学生

ラファイック・ワデイ・サリブ

私はエジプト出身のラファイック・W・サリブ、一九五八年一〇月一七日生まれで、スエズ運河大学工学部を卒業し、一九八七年同大学の土木工学の修士号を取得した。鉄骨構造部門に講師として勤めた後、一九八八年一〇月、日本政府(文部省)から奨学金を受け

広島大学工学部に在籍することになり、妻のメアリーと日本で一九八九年七月に生まれた息子のパトリックとともに、日本での生活を送ってきた。

施設に恵まれた広島大学工学部で研究を行うことができ、日本の生活と文化を学ぶことができたことは、私にとって良い機会であった。



幼稚園のスポーツディでの息子パトリック

いえる。妻のメアリーはとても行動的で、日本の伝統的な音楽と生け花に真剣に取り組んだ。息子のパトリックは毎日幼稚園に通って多くの友達と楽しく暮らした。

最後に、私の研究および日常生活に対する皆さんの援助に感謝申し上げます。

いろいろあった二年間

生物圏科学研究科博士課程前期 横山 卓生

学部を含めると計六年間ここ広島大学で過ごしたが、特に院での二年間は

事ができたのも私の財産である。後世に残る研究は、何か人と異なる事がなければできないのだろうか、指導教官の便利な道具になっていたのでは。

は、可能性は皆無だと思ふ。大きな夢を追う時期があってもよいではないか、現実……と酒を片手に。



研究室でのある日のスナップ

私の九年間に及ぶ広島大学での学生生活の中で、友達は大切な位置を占めている。幸い、私は良き先輩・同輩として後輩に恵まれたと思っっている。大学での研究、クラブ活動そして下宿生活を通じて知りあった友達には、いろんな分野、年齢層の人間がいて、彼らは皆かけがえのない自分の財産だと思う。彼らとは、在学中だけでなく卒業してからもお互いに自由な立場から批判し合い、その度に友達のありがた味を痛感した。こんな話は少々前時代的

感謝！

生物圏科学研究科博士課程後期 加来 篤

大学生活・私生活とも中身の濃いものであった。
河川を対象として水文学を学んでいたこともあり野外に出る機会が多かった。自分のフィールドはもちろんのこ



フィールドをした榎川試験流域観測点（安芸郡府中町）にて

と、各種の野外調査で近い所では大山、遠い所では琵琶湖の北まで足を運んだ。外に出るのは大変だが、見知らぬ風景に出会うと固定されたものの見方が変えられていくように思えた。また他大学の施設を利用していただいた事もあった。広島大学の手狭さはやはり普通ではないと痛感した。
二年間の締めくくりに移転を経験した。ぽっかり空いた部屋を見ると、大学に別れを告げた気分になった。移転を機に広島大学がより良い方向に発展していくことを教官・事務官・学生にお願いして大学を去ることにしたい。お世話になった方々に感謝。

The other side of 緊張

生物圏科学研究科博士課程後期 留学生 B・P・プルワント

な印象を与えるかもしれないが、こんなつき合い方は、雰囲気こそ変わってもいつまでも変わらないと思う。社会性の極めて乏しい閉鎖的な大学で生活する人間に、井の中の蛙になるな、もっと別の考え方もあるぞ、国際的、宇宙

的視野を持つと具体的に指摘して、戒めてくれたのは、私の場合やはり友達だった。大学時代の友達は、長い目でみれば、極限られた層の人間かもしれない。でも、私はここで改めてその友達に礼がいたい。

広島と言う町は子供の頃から良く知っている。なぜなら、広島のことにはインドネシアの独立記念日と密接な関係があるからだ。まあ……この事は別にして、広島に留学することができているのが非常に嬉しかったが、私は公務員だから、このことは非常な責任を感じ、大いに緊張して広島へやって来た。これは五年半前のことだ。

あの頃から、研究生活を通じ、科学することの楽しさ、喜びを経験することができ、幸せな五年間であったと思う。この五年間の研究生活の中に科学的な厳しき、あるいは人間的な優しさをご指導いただいた先生方、特に山本先生、伊藤先生、藤田先生は勉強と日常の生活についてお世話になり、困ったことがなかった。日本の学生との交流も楽しい思い出の一つであった。だから、広大に留学することは勉強のためだけでなく、日本人の良い生活あ

るいは考え方をすることも、一つの留学の目的であった。
これからインドネシアへ帰って、広島で学んだことをどうやって生かすか、また緊張する。



サッカー大会で畜産 team のポーズ！